

県育成ニガウリF₁品種「熊研BP2号」の特性

本県独自のニガウリ品種の開発に取り組み、苦みが非常に少なく、いぼがなだらかで、雌花が安定し、多収性なF₁系統を育成した。

農業研究センター農産園芸研究所野菜研究室（担当者：林田慎一）

研究のねらい

ニガウリは近年、食に対する健康志向の影響もあり全国的に消費需要が高まっている。県内においても主にスイカ、メロンからの転換品目、または組み合わせ品目として導入が進み、平成16年産の共販面積は60ha以上と急増している。

しかし、本県では苦みが強く、果実の長いニガウリが従来から栽培・流通されてきたこともあり、現在でもそのような形状のニガウリ栽培が多い。一方、大都市の消費地で流通しているニガウリは短形で苦みの少ない「ゴーヤータイプ」が主流であるため、消費地での本県ニガウリの評価は高くない。

これらのことから、今後、本県ニガウリ生産における商品レベルの統一と品質向上を図り、他県産地との競合に勝ち抜くために、消費者の求める食味、果実品質の優れる県オリジナル品種の開発に取り組み県オリジナルブランドの確立に資する。

研究の成果

多収で果実形質が優れるゴーヤータイプのニガウリF₁品種「熊研BP2号」を育成した。その特性は以下のとおりである

1. こぶ状突起の形状はゴーヤータイプでの県内主力品種の「えらぶ」より明らかに低く丸い。そのため、突起の折れによる損傷は少ない。
2. 苦みは、「えらぶ」に比べ非常に少ない。同時に育成した「熊研BP1号」に比べても少ない。
3. 果皮色は濃緑で、果実の形状は肩がやや張り、やや長い。
4. 3月末定植作型での商品果収量は「えらぶ」と同程度。
5. 収益性試算は、「えらぶ」より若干劣る。
6. 種子親が雌性型であるため、採種コストが抑えられる。

普及上の留意点

1. 雌花節率の高い系統であるため、低温短日期には雄花が非常に少なくなる。
2. 作型は3月定植中心の半促成栽培とする。

表1 果実特性

品種・系統	果皮色	果形	肩部	こぶの高さ、形状	苦み	果重(g)
熊研BP2号	濃緑	やや長い	やや張る	低く、丸い	非常に少ない	266
えらぶ	濃緑	やや長い	やや流れる	やや高く、尖る	少ない	279

表2 収量調査

a当たり37株換算

品種・系統	商品果		規格外品		合計		商品果率 (重量)
	果数	果重	果数	果重	果数	果重	
	果	kg	果	kg	果	kg	%
熊研BP2号	1,610	429	296	68	1,906	497	86.2
えらぶ	1,529	426	222	49	1,751	475	89.7

定植：3/29、 収穫：5/27～8/27

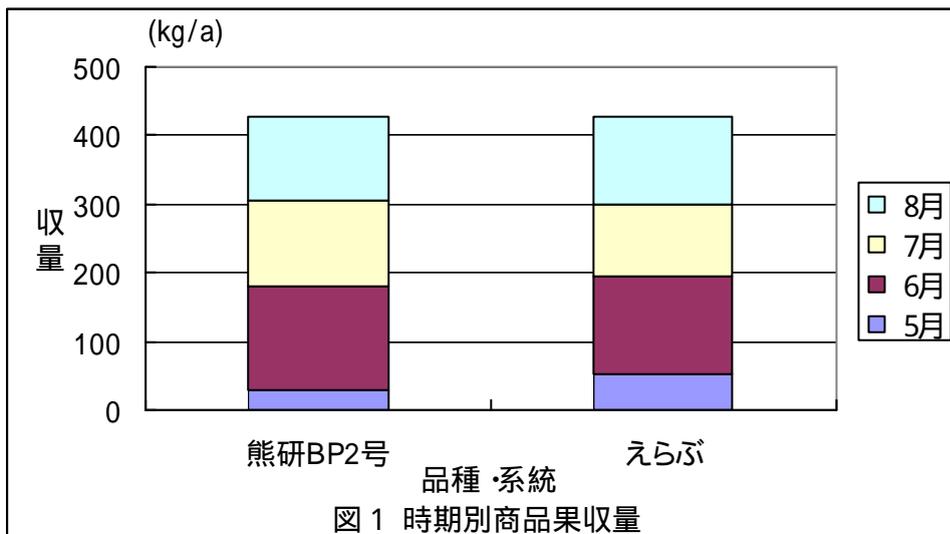


表3 時期別収益試算

(単位：円/a)

	5/下	6/上	6/中	6/下	7/上	7/中	7/下	8/上	8/中	8/下	合計
熊研BP2号	8,969	15,607	13,671	12,086	14,704	11,527	7,093	7,226	6,760	4,806	102,448
えらぶ	16,480	19,823	8,951	11,019	12,571	10,945	4,594	5,360	7,959	6,667	104,371

収量はH16栽培試験結果(3月下旬定植)

単価は旬別販売額実績(熊本県経済農業組合連合会)のH14～H16平均値を使用